

カント批判哲学に於ける構想力概念の成立（下）

松本長彦

《目次》

- 一 序——「主観的演繹」と「構想力」の問題——
- 二 ヴォルフとバウムガルテンに於ける「構想力」の概念
 - 1 ヴォルフに於ける「構想力」概念について
 - 2 バウムガルテンに於ける「構想力」概念について
- 三 独断的哲学から批判哲学への移行——『形而上学講義』の「経験的心理学」の成立時期について——
〈以上（上）〉
- 四 『形而上学講義』における「形成力」の概念
 - 1 感性的能力としての「形成力」
 - 2 時間の三様態と「形成力」の三つの能力
 - 3 「形成力」のもう一つの区分
 - 4 悟性と感性との中間的能力としての「形成力」

五 結語——「形成力」から批判哲学に於ける「構想力」概念へ——

(承前)⁽²⁰⁾

四 『形而上学講義』における「形成力」の概念

1 感性的能力としての「形成力」

我々の問題は「構想力」であった。それ故、我々はカントの「経験的心理学」⁽²¹⁾講述に於ける構想力概念を解明しなければならぬ。しかし、そのためにもまず、「経験的心理学」全体の構成を把握しておかなければならぬ。

まずカントは「精神の諸能力」(die geistigen Vermögen)を三つに区分する。

- ① 「表象の能力」(Vermögen der Vorstellungen) 或は「認識能力」(Erkenntnisvermögen)
- ② 「欲求能力」(Begehungsvermögen)
- ③ 快と不快の能力 (Vermögen der Lust und Unlust)

さらにこれらの各々が「上級」(ober)と「下級」(unter)の能力に区別される(KVM, S. 228)°。そして上級の諸能力が「知性」(Intellectualität)を、下級の諸能力が「感性」(Sinnlichkeit)を構成する(KVM, S. 229)°。

この知性と感性の区別は、ヴォルフやバウムガルテンのようにその表象の判明性に基ついてなされるのではない。

それは、認識能力のまったく新しい原理的規定に基づいて行われる。即ち、感性とは「我々が対象によって触発される限りに於ける、我々の認識能力の受動的性質 (die passive Eigenschaft unsers Erkenntnisvermögens)」であり、知性は「我々の能力の自発性」(die Spontanität unsers Vermögens) である (ebd.)。ここには、カントの批判哲学の重要な枠組みをなす《感性⇨受容性》・《悟性⇨自発性》という対比の構図が鮮明に打ち出されている。つまり、ヴォルフ・バウムガルテンに於いては単に量的な(判明性の程度の)相違として捉えられていた感性と悟性との区分を、カントは質的な(即ちその本性に基づいた)相違として捉え、明確に区分しているのである。このようにカントは、その「経験的心理学」の出発点に於いて、既にヴォルフ・バウムガルテンの思想を克服する立場を明らかにしている。

このように我々の精神の諸能力を区分した上で、カントは、感性的能力を分析し、さらに上級の諸能力を分析してゆく。この感性的能力(より正しくは感性的認識能力)の分析の中に「構想力」(ここでは「形成力」と呼ばれている)についての考察は位置している。

さて、バウムガルテンの『形而上学』に於いては、前述したように、下級認識能力に属するものとして「感能」「構想力」「記憶」「創作力」等々が並列的に述べられていた。しかし、カントの感性的認識能力の分析に於いては、「感能自身の能力」(das Vermögen der Sinne selbst) (KVM, S. 230) 或いは「感覺能力」(Empfindungsvermögen) (KVM, S. 235) と「感能の模倣的認識」(die nachgeahmte Erkenntnis der Sinne) の能力である「形成力」(die bildende Kraft) (KVM, S. 230) との区分があるだけである。この区分は、その能力のもつ表象が、「すべて対象の印象によって生じる」のか、それとも「心の自発性から生じる」のかという相違に基づいている。これはまた簡潔に、「与えられた」(gegeben) 認識であるか、「作られた」(gemacht) 認識であるかの相違とも表現されている

(abd)。それ故、バウムガルテンに於いて「構想力・記憶・創作力・等々」と呼ばれていた能力が、ここでは「形成力」としてまとめて捉えられているのである。

しかし我々は、ここに一つの問題が存することに気付く。カントは、感性と知性とを区別する根拠を、我々の心の受容性と自発性の対立に求めたはずである。しかるに、感性の能力の内部でも、「感能」と「形成力」は、受容性と自発性の対立によって区別されている。それ故、形成力は《自発的感性的能力》と規定されることになる。しかし、カントの定義に従えば、感性的能力とは心の受容性であり、知性的能力は心の自発性であった。してみれば、《自発的感性的能力》というのは《丸い三角形》のような形容矛盾ではないかという疑問が生じるのである。換言すれば、形成力はむしろ知性の側に属する能力ではないか、という疑念が起ころざるをえないのである。これに対して、カントはどのように答えているであろうか。

まずカントは、認識が感性的であるのは、「それが、心が対象から触発される限りに於いて、心の中で生じる」(KVM, S. 229.) からであり、知性的であるのは、「それが我々自身から生じる」(abd.) からであると言う。即ち、「表象が感性的であるか知性的であるかは、その起源による」(KVM, S. 230.) のである。それ故、感能に由来する認識はすべて感性的である。これに対して、知性的認識は「自発的」であり、「対象からまったく独立した」(KVM, S. 229.) ものである。ところで、形成力の認識は、「その下で心が対象によって触発されるところの制約の下で」(KVM, S. 230.) 心から生じるものである。このような制約は、決して知性のもたないものであり、感性に存するものに他ならない。従って、形成力の認識は、確かに心の自発性から生じる認識ではあるが、常に対象による触発を前提しており、「対象からまったく独立した」ものではありえないが故に、その本性に於いて感性的なものであるしかない。それ故に、「形成力」自身も感性的な能力と規定されねばならないのである。

2 時間の三様態と「形成力」の三つの能力

カントがこのように「形成力」を感性的能力として規定し、それを「感能」と密接に関連したものと考えながら、なお感能とは区別する点では、ヴォルフ・バウムガルテンと大きな隔たりはないように見えるかもしれない。しかし、彼らが構想力を単なる経験的再生の能力と考えたのに対して、カントは「形成力」を再生の能力には限定しない。彼はこの能力を「それに従って対象が我々の感能を触発するであろうところの形式をそれ自体でもっている認識を我々自身から作り出す能力」(KVM, S. 235)と規定する。ここに言われる「形式」とは「時間」(Zeit)に他ならない。それは、すぐに続けてカントが次のように述べていることから明らかである。

「この形成能力 (dieses Bildungsvermögen) は、現在の時の表象 (Vorstellungen der gegenwärtigen Zeit) 、過去の時の表象 (Vorstellungen der vergangenen Zeit) 、または未来の時の表象 (Vorstellungen der zukünftigen Zeit) を産み出す。従って形成能力は、

- 一 現在の時の表象の能力である現形成 (Abbildung) の能力、即ち形象力 (facultas formandi) 、
- 二 過去の時の表象の能力である追形成 (Nachbildung) の能力、即ち想像力 (facultas imaginandi) 、
- 三 未来の時の表象の能力である先形成 (Vorbildung) の能力、即ち予見力 (facultas praevidenti) から成っている。」(ebd.)

これらの能力は、さらに次のように規定される。

カント批判哲学に於ける構想力概念の成立(下)

まず「現形成の能力」は、「多様を通覧することによって多様の形象 (das Bild des Mannigfaltigen) を形成する」(ebd.) とするの「直観の形成的能力」(das bildende Vermögen der Anschauung) (KVM, S. 236.) である。次に「追形成の能力」は、「連想」(Association) によって過去の時の表象を再生する能力であり、「想像の能力」(das Vermögen der Imagination) とも呼ばれる (ebd.)。ちなみに、ここでカントは、「想像の能力」と「構想能力」(das Einbildungsvermögen) とを区別することを説いている。「私が以前見たことのある或る宮殿を構想」(想像) する (einbilden) 場合の能力は、「私が新しい形象を作る (neue Bilder machen) 場合の能力とは、まったく別の能力である。後者が構想能力である。」(ebd.) 訳語の問題も絡んで、少々混乱するかもしれないが、この「構想能力」については、後に改めて取り上げることにする。

最後に「先形成の能力」は、「未来のことについて予め或る形象を作り、或ることを予め構想」(想像) する」(ebd.) 能力である。「未来のことは、私の内に何の印象も、従って何の形象 (Bild) も作らない。」(ebd.) それにもかかわらず、我々は未来のことについても、何らかの形象を作ることができる。このような、「未来のこの先形成」(予見) (Vorbildung des Künftigen) は、「過去の表象が現在の表象に対してもつ関係と現在の表象が未来の表象に対してもつ関係との同種性に基づいている。即ち、我々は「過去↓現在」の関係を「現在↓未来」の関係に当てはめて、未来のことについての形象を予め形成するのである。この「先形成」もまた「想像力の法則」(Gesetzen der Imagination) (ebd.) (即ち「連想」) に従って行われる。

このように「形成力」は三つの形式に於いて現れるのであるが、改めて指摘するまでもなく、「形成力のこの相違は時間に関係してゐる。」(KVM, S. 237.) 即ち、「形成力」は、時間の三様態 (現在・過去・未来) に本質的に関わり、それに基づいて三つの形式に於いて現れるのである。そしてこのことは、「形成力」自身の本性によるものと

考えることができる。何故ならば、既に述べたように、この能力は、「それに従って対象が我々の感能を触発するであろうところの形式をそれ自体でもっている認識を我々自身から作り出す能力」(KVM, S. 235)であり、このような「形式」というときにカントの念頭にあったのは、言うまでもなく「空間」と「時間」という感性の形式的原理に他ならないからである。²⁸⁾

「形成力」が、「空間」「時間」という感性の形式的原理を内包する認識(従って表象)を自分自身から作り出す能力である以上、この能力は必然的に、《現在・過去・未来》という時間の三様態をそれ自身のうちにもつ表象を産出する能力として規定されざるをえず、三つの形式に於いて現れざるをえないのである。

3 「形成力」のもう一つの区分

このような時間に関係した区分の他に、カントは形成力のもう一つの区分を示している。それは、「構想能力」(das Vermögen der Einbildung)と「模写能力」(das Vermögen der Gegenbildung)とへの区分である。

「構想能力は、対象の現実性とは無関係に形象を自己自身から産出する能力であり、その場合形象は経験から借りられることはない。…(中略)…この能力は空想の能力(das Vermögen der Phantasie)と呼ばれる。この能力を想像力(Imagination)と混同してはならない。構想力(Einbildungskraft)は感性的創作力(eine sinnliche Dichtungskraft)である。もっとも、我々はまたまた、悟性の創作力(Verstandes-Dichtungskraft)もあるのであるが。」(KVM, S. 237.)

この「構想能力」の規定は、ほぼバウムガルテンの「創作力」(Facultas fingendi)の規定と同じであると言うことができよう。このカントの規定は、後に『判断力批判』に於いて、特にその「天才」(Genie)論に於いて説かれた、「現実の自然が与える素材から、いわば別の自然を創造することに於いて非常に強力な」能力としての「構想力」の概念へと繋がってゆくものであろう。

「模写能力は特性描写の能力 (das Vermögen der Charakteristik) である。特性描写とは、他のものの模写 (das Gegenbild) である。模写とは、他の事物の形象を産出する手段である。従って、言葉は、物事の表象を作り出すための、物事の模写である。模写能力は、このように形象を表象するが故に、感性に属している。もっとも、形象は対象の影響によって生ずるのではなく、我々自身から生ずるのではあるけれども。しかしこの能力は、形式から見て、やはり感性に属しているのである。」(ebd.)

「模写能力」の方は、「他の事物の形象を産出する手段」を与える能力と規定されているが、「言葉」(Worte)が「物事の表象を作り出すための、物事の模写」と言われていることから理解されるように、この規定は、形成力が「形象」そのものを産出する能力であるにとどまらず、形象を産出する手段に関わる能力であり、「言葉」によって表される「概念」に関係し、概念と形象とをつなぐ役割を果たしうることを示唆している。従って、「模写能力」の規定は、『純粹理性批判』の「図式論」(Schematismus-Kapitel)に於ける、「或る概念にその形象を付与する構想力の一般的な手続きの表象を、私はこの概念に対する図式 (Schema) と名づける。」(A 140, B 179f.)と云う「構想力の図式機能」(der Schematismus der Einbildungskraft)へと発展してゆくことを予想させる。さらにカントは、

「模写能力」に関して、「象徴」(Symbolum) 即ち「連想による再生の手段として役立つ表象」(KVM, S. 238.) を取り上げている。これは、「判断力批判」に於ける「象徴」(Symbol)⁽²⁸⁾の概念に発展するものと考えることができよう。「形成力」に属するこの二つの能力に加えて、カントはさらに「完成〔仕上げる〕能力」(das Vermögen der Ausbildung) を提示している。

「最後に完成能力を付け加えることができるであろう。我々はすべてのものを仕上げ完成させる能力のみならず、その衝動をももっている。様々な物事や物語、喜劇等々が不十分であるように思われるときには、それらを完成させようと我々は絶えず努力するものである。物事が完全でないことにひととは怒りを覚える。このことは、全体の理念を作り、対象をこの全体の理念と比較する能力を前提している。」(ibid.)

批判哲学に於いては、全体の理念を作るのは、「規則の能力」(das Vermögen der Regeln) (A 126.) である「悟性」(Verstand) とは区別される、「悟性の諸規則を諸原理の下に統一する能力」(das Vermögen der Einheit der Verstandesregeln unter Prinzipien) (A 302, B 359.) である「理性」(Vernunft) である。その意味では、「この「完成能力」の規定は、カント的な規定でないように思われるかもしれない。しかし、「理念」(Idee) とは「理性概念」(Vernunftbegriff) であり、「構想力」とは概念と具体的な対象の表象とをつなぐ役割を果たす能力であるという、批判哲学に於けるカントの考え方を考慮すれば、完成能力の規定も、まったく批判哲学に矛盾した規定とまでは言えないのである。むしろ我々は、『道徳形而上学の基礎づけ』に於ける「幸福は、理性の理想ではなく、むしろ構想力の理想 (ein Ideal der Einbildungskraft) である。それはただ経験的根拠だけに基づいている。」⁽²⁹⁾ という文言と

の連関を考えるべきであろう。

4 悟性と感性との中間的能力としての「形成力」

カントは、以上のように「形成力」の中にさらに細かな能力の働きを分類した後、次のように述べている。

「形成力のこれらの作用はすべて、随意的 (willkürlich) にも不随意的 (unwillkürlich) にも起るることができる。これらの作用が不随意的に起る限り、それらはまったく感性に属している。しかし、それらが随意的に起る限り、それらは上級認識能力に属するのである。記憶 (das Gedächtnis) は、随意的な想像 (Imagination) 又は追形成 (Nachbildung) の能力であり、それ故記憶と追形成の能力との間に本質的相違は存在しない。… (中略) … 随意的構想能力 (das willkürliche Einbildungsvermögen) は創作能力 (Dichtungsvermögen) である。」(KVM, S. 237.)

ここでは、形成力の作用が随意的であるか、不随意的であるかに従って、その作用が感性に属するのか、上級認識能力即ち知性に属するのかが異なることが述べられている。しかし、この記述は、既に確認した《感性的能力としての形成力》という規定に抵触するようにも思われる。

この問題を解く鍵は、「形成力の作用」(Actus der bildenden Kraft) という語にある。そして、これが実は『純粹理性批判』に於ける「主観的演繹」へとつながるポイントでもある。カントは、この形成力の考察に続いて「上級

認識能力について」の考察に移り、「悟性」について次のように述べている。

「直観の諸対象について我々は、悟性と感性の間にある形成力によって、知識をもつ。この形成力が抽象的 (in abstracto) である場合、それが悟性である。抽象的に考えられた形成力の諸制約や諸活動が、純粹悟性概念であり悟性のカテゴリーである。」(KVM, S. 239)

ここでも「抽象的である形成力」が「悟性」と言われている。しかしそれは、「形成力」そのものが「悟性」であるということではない。形成力は「悟性と感性の間にある」(… welche zwischen dem Verstande und der Sinnlichkeit ist)。即ちここでは、形成力は、悟性と感性との中間に位置する能力として規定されているのである。そして、ここで述べられていることは、悟性の作用(思惟の自発性の作用)は、直観の対象を認識として成立させるときには形成力の作用として働く、ということである。即ち、悟性の自発性の作用と、随意的な形成力の作用とは、心の同じ一つの作用の現れと考えられているのである。ここで述べられていることは、カントが『純粹理性批判』第一版の所謂「主観的演繹」に於いて、「三重の綜合」として明らかにした認識主観の働きに直結する考え方であり、それは、『純粹理性批判』第二版に於いても「構想力の超越論的綜合」(die transzendentale Synthesis der Einbildungskraft) (B 152.) や「生産的構想力」(die produktive Einbildungskraft) (ebd.) という概念によって語られる考え方である。

「構想力は、或る対象をそれが現在していなくても直観に於いて表す能力である。さて、あらゆる我々の直観は

感性的であるから、構想力は、その下でのみ構想力が悟性概念に対して対応する直観を与えることができるその主観的制約の故に、感性に属している。しかしながら、構想力の綜合が自発性の行使である限り——それが規定するものであり、感能のように単に規定されるのではない、従ってア・プリアオリに感能をその形式という点から統覚の統一に従って規定することができる自発性の行使である限り——、構想力は、感性をア・プリアオリに規定する能力であり、構想力がカテゴリーに従って行う直観の綜合は、構想力の超越論的綜合でなければならない。これは悟性の感性に対する作用であり、我々に可能な直観の諸対象に対する悟性の最初の適用（そしてあらゆる他の適用の根拠）である。この綜合は、形象的なものとして、あらゆる構想力を欠いた悟性だけによる知性的綜合とは区別される。構想力が自発性である限り、私は時としてこれを生産的構想力と名づけ、それによって再生的構想力と区別する。」(B 151f.)

このようにカントが『純粋理性批判』第二版に於いて明確かつ簡潔に述べた、構想力が感性に属す能力であること、しかしその働き（綜合の作用）は、自発性の作用である悟性の作用に他ならないこと、そしてこの構想力の綜合によって悟性は感性に作用することができることが、『形而上学講義』に於いても述べられているのである。²⁸⁾

五 結語——「形成力」から批判哲学に於ける「構想力」概念へ——

このようにして我々は、カントが行った経験的心理学から超越論的哲学への移行の一典型を見ることができ。カントは、ヴォルフ・バウムガルテンの「経験的心理学」を利用しながら、そこに述べられた諸概念にいわば超越論的

な省察を加えることによって、それらを改編し、我々の認識の主観的制約を明らかにしてゆく。三木清が指摘するように、まず我々は「その現形成の能力においてはバウムガルテンの感覚sensus、追形成の能力においてはバウムガルテンの記憶memoria」、そして先形成の能力においてはバウムガルテンの先見力praevisionを認め得る」⁽²⁸⁾であろう。しかしカントは、このような経験的諸能力の考察から、それらを統一する「形成力」という能力へと考察を深め、さらにこの能力が我々の認識の形式的制約である「時間」と密接に関連していることを明らかにする。このようにして彼は、経験的諸能力の分析から出発しながら、我々の認識の制約が如何なるものであるか、我々の認識が如何にして可能であるか、という問題に迫る手掛かりをつかむのである。この「形成力」が「時間」と不可分に連関しているということは、『純粹理性批判』に於ける「構想力」概念に直接繋がっている。実際、「現形成の能力」は『純粹理性批判』第一版の「純粹悟性概念の超越論的演繹」に於ける「構想力の三重の綜合」(eine dreifache Synthesis der Einbildungskraft)の「把握の綜合」(die Synthesis der Apprehension)に直結すると考えられるし、「追形成の能力」は「再生の綜合」(die Synthesis der Reproduktion)の先駆的形態と考えられる。それ故我々は、このカントの「形成力」の考察に於いて、「純粹理性批判における先験的構想力の本来の領分が時間であるといふ説の萌芽を見出すことができる」と言うことができるのである。

これを改めて整理しておこう。『形而上学講義』では、カントは「構想力」(Einbildungskraft)という語を狭い意味で捉え、広義の「構想力(または想像力)」を「形成力」(die bildende Kraft)と呼ぶ。それは「形象」(Bild)を自ら作り出す能力である。またカントは、ヴォルフとバウムガルテンと同様に、構想力を感性の能力と規定する。しかし、ヴォルフやバウムガルテンがこの能力を経験的再生の能力に限定したのに対して、カントはこの能力を経験的再生だけには限定しない。むしろ、「時間」との本質的連関を示すことによって、この能力の純粹な使用の可能性

を示唆している。また、それによって同時に、我々のア・プリオリな認識の可能性を解明する手掛かりを与えているのである。

このようなカントの超越論的な省察の成果は、「純粹悟性概念の超越論的演繹」に於ける体系的叙述として結実する。そこでは、この『形而上学講義』に於いてさりげなく語られた概念や、まだバウムガルテンの分類の影響から十分に脱しきっていないように思われる規定が、超越論的哲学の核心部分に於いて「思惟する我」が認識を行うための不可欠の要素として、認識能力の体系的連関の下で、かの「主観的演繹」として語られるのである。

(一)

注

(20) 本稿は、『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第二十五号に掲載した、拙稿「カント批判哲学に於ける構想力概念の成立(上)」の続編である。

(21) カントは、物理学 (Physik) が「外感または物的存在者の自然学」(eine Physiologie des äußern Sinnes oder der körperlichen Wesen) であるのに対して、心理学とは「内感または思惟的存在者の生理学」(eine Physiologie des innern Sinnes oder der denkenden Wesen) であり、その間の考察が経験を通して行われるのが「経験的心理学」(psychologia empirica) である(定義)である (KV M, S. 224)。これに対して「理性的心理学」(psychologia rationalis) は「思惟的存在者を単に概念から考察する」(ibid.) ものである。(22) 本稿では、「形成力」のもっとも基本的な分類として、この三つの能力への分類を示したが、カント自身の叙述はもう少し複雑である。彼は、

「あらゆる感性的認識は、与えられた認識であるか作られた認識であるかのいずれかである。与えられた認識の中に、感能一般、或いは感能自身の表象を数え入れることができる。作られた認識の中に我々は、

- (1) 創作能力 (facultas fingendi)
 - (2) 構成能力 (facultas componendi)
 - (3) 指示能力 (facultas signandi)
- を数え入れることが出来る。
ところで創作能力には、

- (1) 形象力 (facultas formandi)
 - (2) 想像力 (facultas imaginandi)
 - (3) 予見力 (facultas praevidenti)
- が属している。

従って形成力の表象は、次のように区分される。

- (1) 類 (genus) である形成力それ自体
- (2) 現形成力 (Abbildungskraft) / 形象力 (facultas formandi)
- (3) 追形成力 (Nachbildungskraft) / 想像力 (facultas imaginandi)
- (4) 先形成力 (Vorbildungskraft) / 予見力 (facultas praevidenti)

これらの力はすべて、感性的能力である形成力に属する。感性に属するこれら形成力は、悟性に属する思惟力と区別される。」
(KVM, S. 230f.)

という分類を提示している。「形成力」に属するより下位の三つの能力に関しては、詳細に述べられているが、「構成能力」と「指示能力」に関しては、これ以上の説明はなされていない。

- (23) これは「純粹理性批判」に於けるカントの立場であるが、「時間」(及び「空間」)が、我々の認識の「主観的制約」(subjectiva conditio)であり「純粹直観」(intuitus purus)であること、及び感性的認識の「第一の形式的原理」であることは、一七七〇年の『感性界及び観智界の形式と原理について』(De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principis 以下、同書にDe mundi 二略記¹⁷⁾)

カント批判哲学に於ける構想力概念の成立(下)

に於るべき主観をいふに (Vgl. *De mundi*. §. 14, AA. Bd. II, S. 400; §. 15, S. 402f.)。

「感性 (sensuaitas) とは主観の客体相 (receptivitas subiecti) である。この客体性の故に、何らかの客観の現前を以て特定の仕方でも主観の表象状態が触発せらる (afficiatur) … (中略) … 感性の客観は回感的 (sensibile) である。」 (*De mundi*. §. 3, AA. Bd. II, S. 392)

「時間 は感性世界の絶対的の第一の形式的原理である。」 (Tempus … est principium formale mundi sensibilis absolute prium.)

(*De mundi*. §. 14, AA. Bd. II, S. 402.)

「時間 は、何か客観的なものでない、インテリブルなものでなく、実体でも偶有性でも関係でもない。むしろ回感的なものでなくては或る特定の法則に以て秩序づけられるための、人間の精神の本性による必然的な主観的制約であり、また純粹直観である。」 (*De mundi*. §. 14, AA. Bd. II, S. 400.)

「空間は感性世界の絶対的の第二の形式的原理である。」 (Spatium … est principium formale mundi sensibilis absolute prium …) (*De mundi*. §. 15, AA. Bd. II, S. 405.)

しかし、それが明確に内的直観の形式として規定されるのは、やはり『純粹理性批判』に於てである (Vgl. *KdV*, §§. 4—6)。それは故我々は、『形而上学講義』(「ノート」)の時点に於いてカントは『純粹理性批判』に見られるような「時間」の概念に到達して居ることを示すことができる。それを証示するのが、「それに従って対象が我々の感能を触発するものである」の形式」(*KVM*, S. 235.) による表現である。

(24) Vgl. Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, §§ 49f., AA., Bd. V, S. 313—320.

(25) Vgl. a. a. O., §. 59, AA., Bd. V, S. 351—354.

(26) Immanuel Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, AA., Bd. IV, S. 418.

(27) 拙稿「カントに於ける「構想力」について」(『マンホシオン』第三〇号第二分冊、広島大学文学部哲学研究室、一九八四年、五七一—七〇頁) 参照。

(28) ちなみに、『形而上学講義』では、この形成力と悟性との関係を巡る叙述に直接接続する形で、

「ア・プリオリな悟性のあらゆる最高原則は、形成力の諸制約をあらゆる現象に於いて表現する普遍的諸規則であり、これによって我々は、諸現象が互いにどのように結合されなければならないかを規定することができる。何故なら、認識を可能にするもの、認識の制約であるものが、また物の制約と同一だからである。」(KVM, S. 239.)

「諸対象は、その下でそれらの対象が認識されうる諸制約と一致しなければならない。これが人間悟性の本性である。」(ibid.)
という叙述がある。これは、『純粹理性批判』第一版の「演繹」に於ける

「可能的経験一般のア・プリオリな諸制約は、同時に経験の諸対象の可能性の諸制約である。」(A 111.)

及び「原則の分析論」の第二章「純粹悟性のあらゆる原則の体系」の第二節「あらゆる綜合的判断の最高原則」に於ける有名な一節、「経験一般の可能性の諸制約は、同時に経験の諸対象の可能性の制約であり、それ故にア・プリオリな綜合的判断に於いて客観的妥当性をもつ。」(A 158, B 197.)

とほとんど同じ命題である。

(29) 三木清、前掲書、七〇頁。

(30) 三木清、前掲書、七〇頁。